土佐日記地理考

―一月十七日室津出航後引き返した泊りは、室津か、白浜か、津呂か―

竹村義一

はじめに

承平五年一月十七日（太陽暦九三五・二・二七）紀貫之は土佐の国府を出発して二十六日目、いよいよこの航海最大の難所の御崎回りを決行せんと、暁月夜を利して室津の泊りを出航した。早暁の月明下の海と空の趣を漢詩と和歌に託して感懐を遣っているうちにだんだん夜が明けていく。その時、

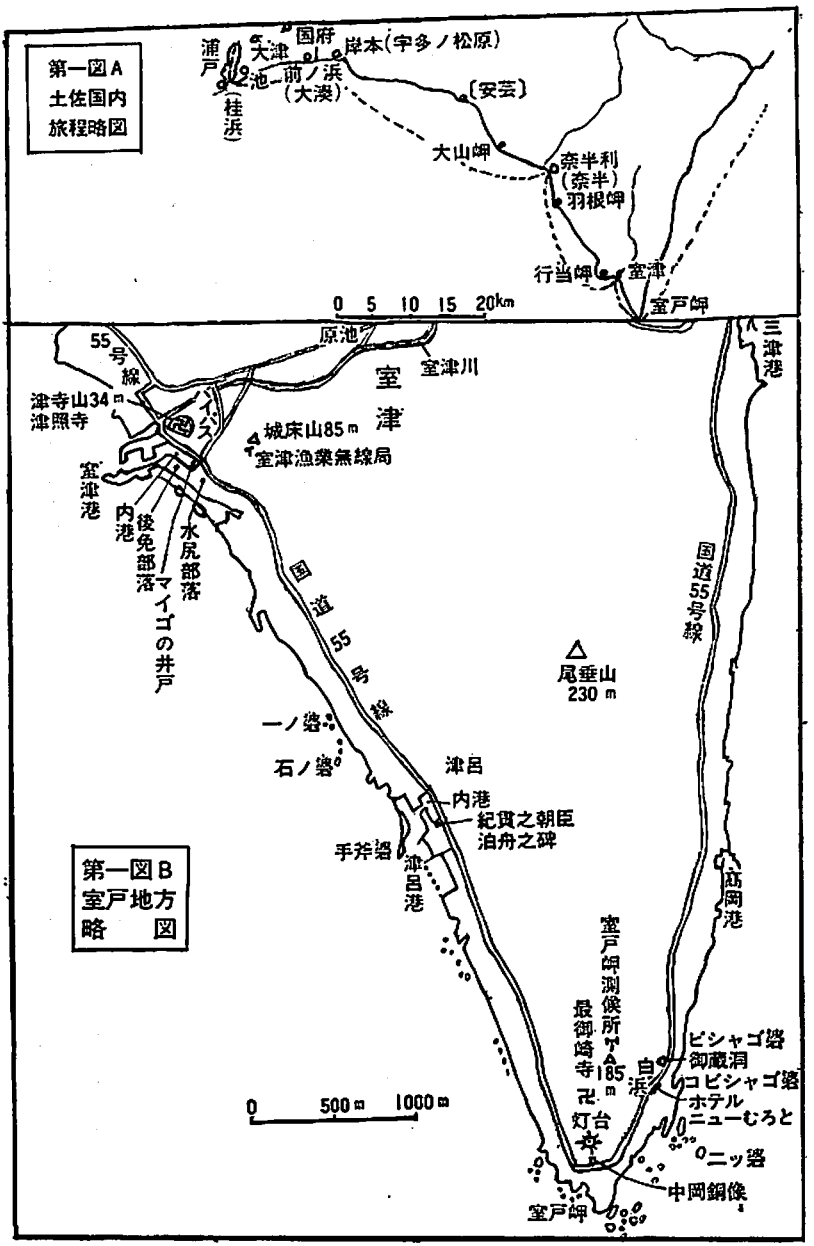
舵取ら「黒き雲俄かに出で来ぬ。風吹きぬべし。御船返してん。」

と言ひて、船返る。この間に雨降りぬ。いとわびし。

この時引き返してきた泊地が従来は単純にもとの室津と考えられていたのに対して、昭和37年に室戸の人久保田博氏が、室戸岬を東へ回った所の白浜であるという提案をされ、それを松村誠一氏が、「土佐日記の『地理の誤り』について」（高知大学学術研究報告・昭和40・2）で紹介し、構想論の上からの論考を発表された。ついで萩谷朴氏は「土佐日記全注釈（昭42）」で、これを検討し津呂説を提案された。その後、室戸市教育委員山本武雄氏が、「土佐日記むろつの泊りについて」（昭43頃）という論考を孔版で刊行し（昭47・3・15室戸市教委発行、同市教育研究協議会編集「室戸のくらし」に採録）、室津説を主張されている。その説を紹介しながら、私見を述べたい。

久保田氏の白浜説は、「室戸町誌」（昭37・12）の中の「室津の泊に船繋りする人」でまず発表、さらに問題点について、「土佐史談」一〇九号（昭40・3）に「土佐日記に於ける御崎の泊りについ

第 一 図


第一図A
土佐国内
旅程略図
浦戸
大津
国府
岸本(宇多ノ松原)
池
前ノ浜
(大湊)
(桂浜)
(安芸)
大山岬
奈半利
(奈半)
羽根岬
行当岬
室津
室戸岬
0 5 10 15 20km
55号線
原池
室津川
室津
三津港
津寺山34m
津照寺
バイパス
城床山85m
室津漁業無線局
室津港
内港
後免部落
水尻部落
マイゴの井戸
国道55号線
尾垂山
230m
一ノ碆
石ノ碆
津呂
内港
紀貫之朝臣
泊舟之碑
手斧碆
津呂港
第一図B
室戸地方
略 図
高岡港
室戸岬測候所
最御崎寺
185m
ビシャゴ碆
御蔵洞
白浜
コビシャゴ碆
ホテル
ニューむろと
二ッ碆
灯台
中岡銅像
室戸岬
0 500m 1000m

て」を発表された。久保田説の根拠は次の三点である。

(一)当日の気象の問題――黒き雲がにわかに出て来たのは、前線が張り出して来た事で、風は北西の季節風である。故に元の室津（北北西に当る）へ帰ることは考えられない。

(二)景色の問題――十八日に、その泊りの景色をおもしろいと言っているのは、今までと異なる泊地でなければならぬし、風景の秀抜な室戸岬こそふさわしい。

(三)廿日の記事で、月が海から出て海に入るのは、岬の突端以外には求められない。

一、気象の問題

(1)当日の気象状況

なお、一月十一日以降碇泊の「室津の泊」は、現在の室戸市室津説をとる。津呂説はとらない。貫之らの室津滞留中の天気模様を、日記の記述から整理すると下の表のようになる。この期間の日記の文について、高知地方気象台並びに室戸岬測候所の方に気象状況を判断して頂いたところをまとめると次のようになる。

十三日からは、太平洋上にある低気圧のため悪天候が続くが、やがて低気圧が遠ざかって、小さな高気圧（移動性）の範囲内に入

貫之一行室津碇泊中の天候一覧　（注）○好天　×悪天　△不明　(○)(×)は推定。

(太陰暦) 月	日	(太陽暦) 月	日	天候	滞在地	天候記事
1	11	2	21	○	(奈半	より室津にいたる）（好天）
	12		22	△(○)	室津	雨降らず。
	13		23	×	〃	暁にいささか雨降る。しばしありてやみぬ。
	14		24	×	〃	暁より雨降れば，同じ所に泊れり。
	15		25	×	〃	なほ日の悪しければ，ゐざるほどにぞ…
	16		26	×	〃	風波やまねばなほ同じ所に泊れり。（ただ海に波なくして，いつしか御崎といふ所渡らんとのみなん思ふ。)風波とにに（急ニハ）やむべくもあらず。
	17		27	○ ×	〃	曇れる雲なくなりて，暁月夜いとおもしろければ，船を出だして漕ぎ行く。「…かく言ふ間に，夜やうやく明け行くに舵取ら「黒き雲俄かに出で来ぬ。風吹きぬべし。御船返してん」と言ひて船返る。この間に雨降りぬ。いとわびし。
	18		28	×	〃	なほ同じ所にあり。海荒ければ，船出ださず。
	19	3	1	×	〃	日悪しければ船出ださず。
	20		2	×	〃	きのふのやうなれば，船出ださず。
	21		3	○	〃	（好天）卯のときばかりに船出だす。

り、十七日には一時的に穏やかな天気になる。（そして出航する）しかし寒冷前線が近づく。（船を返す）雨が降る。やがて前線が通過して、大陸の高気圧が張り出してくる。そのため十八日からは北西の季節風が吹き海が荒れる。

問題を十七日に絞る。この日の気象の変化を、「前線が張り出してきた」と判断する点では、大綱において久保田氏が昭和三六年に室戸岬測候所で調べてもらったというのと一致する。雨のあとで吹く風が北西の季節風であろうという点でも私の場合の判断と異なることはない。ところが、問題の焦点は、黒い雲を能取が発見して、風が吹いてくるまでに、どれくらい時間があるか、出航地の室津まで引き返すだけの時間がないかどうかにある。

ここで私たちは、いやでも気象学の最小限度の知識を要求されることは、やむを得ない仕儀である。まず前線とは、どういうもので、どうして起こるか、ということから始めねばならない。以下「気象の事典」（東京堂）ならびに気象台の人の教示による。

発生地の違う二つの気団の境界が不連続面（その巾は二〇―五〇km）となっている場合、その面を前線面と呼び、前線面と地表面の交わる線を前線（不連続線）という。前線面及び前線をあわせて前線と呼ぶことも多い。実際には密度の代りに気温の不連続面と考えてさしつかえない。密度・温度・風向・風速等の不連続的変化を伴い、さらに雲を発生し、雨や雪などを降らせるので、天気変化に重要な役割を演ずる。

前線のうち、その移動の方向が密度の大きい気団（寒気）の側から密度の小さい気団（暖気）の方に向かっているものを寒冷前線といい、暖気側から寒気の方に向かっているものを温暖前線と言う。

寒冷前線に二種類あり、第一種は、その進行と同時に寒気団が暖気団を押し上げる格好になっており、暖気団内の空気は上昇に伴う断熱冷却により飽和し、広範囲にわたる雲や降水を生ずる。この種のものは概して進行が遅い。これに反し、第二種の寒冷前線にあっては、上層の暖気団内の風速が寒気団内の進行速度より速いために、相対的に前線面を吹き下りる格好となり雲や降水を伴わない。ただ前線前方の暖気団内で収斂する気流による驟雨を伴うことがある。

気象の知識の乏しい私には、日記の天候は右の二種のどちらに当たるか判断はむずかしいが、「黒き雲の出現」と、「この間に雨降る」という記述が、第一種の「広範囲にわたる雲や降水を生ずる」にあてはまるのでないかと考えられる。第二種の「前線前方に驟雨を伴う」という項目にも当たるとも考えられる。が、第一の場合の可能性が強いではないか。

さて、その問題の前に私には、一つの疑問が浮かんだ。それは、

十七日の穏やかな天気は高気圧（小さいもので、移動性と考えられる）の範囲にあったと推定されるし、その後前線通過後大陸からの高気圧がせり出して来たと判断している。前に見た如く「前線」の定義として、「二つの異質の気団の境界に発生する」というが、二つとも高気圧であるのに、どうして異質の気団なのであるかという疑問である。これについて気象台の人の答えは、高気圧が大陸から東支那海に出て東に進むと黒潮海流から水蒸気が昇り、その影響を受けて温かくなり、性質が変わってくるというのである。したがってこの場合前線の発生ということは十分首肯できるところである。

なお、この日の天候の変化は南方海上に低気圧が出現したためではないかという点を一応考えてみる必要があるが、気象台の人は、はっきりした低気圧なら前兆があり、前もって南風が強く、出港できないはずだ、と言われる。

以上によって私たちは十七日の天候の変化を寒冷前線の出現によるといちおう判定することができる。

なお十七日の前と後には、日本海に低気圧が存在したと考えられるという見方もある。気象状況というのは複雑で、いろいろの要素が存在するであろう。ここでは問題を十七日に限定して考えた。

(2) 船はどの地点まで進んでいたか

ここで私たちは、ひとまず気象の問題から「土佐日記」に立ち戻ることとする。一月十七日暁月夜に室津の泊りを出航した貫之たちの船は、夜がようやく明けゆく時、舵取らが黒き雲を発見して船を返すまでに、船はどこまで進んでいたかが、問題点となってくる。

まず十七日、暁月夜に船を出だしたのは、何時ごろと考えるか。「あかつき・あかとき」は「夜明け前のまだ暗いうちをさす……だいたい午前三時から五時ごろ。鶏鳴（推古紀一九年）・五更（万葉三〇六一）を〝あかとき〟と読んでいる。五更は春分・秋分で四時、夏冬それぞれ一時間の幅をみればよい。（時代別国語大辞典・上代篇）」。この日は太陽暦二月二十七日であるが、「暁月夜」という場合は、夜明け方に照る月の意で、必ずしも「暁」の刻限にはこだわらぬ用い方をしていると考えられるし、出航は五時前後と考えるのが穏当でなかろうか。

高知新聞社発行・高知年鑑昭和31年度版別刷付録「高知の暦象」によれば31年の太陰暦一月一七日は太陽暦二月二八日に当たり、日出六時三七分、月出二〇時三二分、月入七時二六分、満潮七時二五分、干潮一時二〇分である。（昭和31年は、太陰暦と太陽暦の暦日の関係が承平五年と同じである）天気の良い日ならば日の出前三、四十分にはもう明るくなり、遠くまで見通しが利くようになることは私の経験からも言える。また室戸の漁業関係の人に尋ねたところでも、それくらいの時刻には水平線に現われる雲は見えるぐらいの

明るさになるという。したがって、この場合の雲の発見時刻は六時ごろと判断する。

とすると船出してから約一時間ということになる。この間に、作者は雲の上も海の底も同じように薄白く光っている風景に詠嘆し、昔の男の漢詩を引用し、それに対応する和歌をよむ。そういう文学的想念にふける時間として、一時間という時間は短か過ぎはしないであろう。

ではその時、船はどの地点まで進んでいたであろうか。第一図でみるように、室津から室戸岬の突端の線まで（山は約八〇度で真東に回る。その下に国道がある。）陸上で約五・五ｋｍ、海上航路で約六ｋｍある。国道から岩礁が約三〇〇ｍ続き、それから若干離れて船は通るので、航路を東へ転ずる地点まで約七ｋｍ（原池からなら約八・五ｋｍ）となる。貫之の船の速度は、室津以後は、おおよそ毎時三―四ｋｍと推算されるが、室津までは、ずっと時間がかかっている。一月九日（二月二〇日）の大湊―奈半間約四〇ｋｍに「朝つとめて」より、夜ふけるまで航行している。「つとめて」といってもかなり遠くから、多くの見送人が来ているのだから、日の出（六時四六分ごろ）よりは早くはあるまい。日入は一七時五四分ごろだから、夜ふけるまでといっても、九時かせいぜい十時ごろではあるまいか。とすると航海時間は一四～五時間となり、毎時二・七～二・八Ｋｍぐらいとなる。航行時間をもっと長くとれば二ｋｍぐらいとなろう。ところが、十一日（二月二十一日）奈半～室津間では「あかつき」（日出六時四五分で、あかつきを十七日の室津発の時と同じく（五時ごろと考える）に出発し「ひる」羽根という所に来る。現奈半利川の河口から、羽根岬沖まで約六ｋｍ。そして、「ひる」を十一時ないし十二時として、六～七時間もかかっている。毎時一ｋｍ前後の計算となる。そして、この日室津到着の時刻は全くわからぬが、奈半～室津間約二一ｋｍに一日を費している。室津到着の時刻はわからぬが、羽根・室津間は羽根岬からは一五ｋｍ、五～七時間を要して、午後五時前後ぐらいに室津に到着したのであろう。そうすると、二一ｋｍを十二時間前後かかったことになり、毎時一・七～一・八ｋｍの速度となる。後の一月三十日の土佐泊から和泉の谷川までの場合約五四ｋｍを一日で航行している。午前〇時から午後六時まで十八時間の航海として毎時三ｋｍを持続した。（沼島沖までは三～五ｋｍ）ことになる。しかし室津までに関する限りでは萩谷氏の言われるように毎時二ｋｍ前後、ないしは三ｋｍ弱ぐらいの推定になる。

ここで一応考慮すべき問題は潮流の関係である。土佐沖には南西から北東に黒潮流軸が流れ、室戸岬のあたりからその分枝流が逆の方向に流れる。しかし沿岸には別に、沿岸流があり、上り潮、下り

潮という。上り潮とは、浦戸から室戸岬の方向（東）に流れる潮を言い、下り潮はその逆に、室戸から浦戸方向（西）に流れる潮を言う。室津の漁業関係の人にきくと、時によって、この上り下りの方向は変化するという。羽根の人山本武雄氏は「土地の漁師に聞くと、奈半利から羽根崎までは上り潮であり、羽根崎から室戸岬までの間は下り潮である、という。」と言っておられる。（山本氏前記論文p8）いずれにしても土佐湾の沿岸には、このような沿岸流があるので、それに逆らう場合は、非常に速度が減ずることとなる。その逆のケースもあるだろうが――これがあるいは、室津までの速度の遅いことと関係があるかもしれない。

さて問題を一月十七日の朝の室津に戻そう。右のように船の時速は実効約二km（速い場合は三Km弱）と推定して話を進めよう。前述のように、午前六時に黒い雲を発見して反転したとすると、五時出発として一時間、船は岬の突端まで六kmのうち二km進んでいたことになり、（四時半出発として、時速三kmの場合は四・五km）、岬の突端までは達していないことになる。

久保田氏は、すでに船は岬を回っていたとしている。岬を回る地点というと、前述（p69）の如く突端の線よりも更に岬の沖を迂回して北東側に出るので、その距離は、さらに二kmほど延びて、室津からは八kmの距離になり、時間的に言ってそこまで達することは、きわめて困難なことになる。

なお今までは触れないできたが、室津泊地の中でも、貫之が船を碇泊させた地点について二つの意見がある。一つは現在の室津港説、いま一つは室津川を約一・五km遡った原池付近とする説である。久保田氏は原池説をとっているので航行距離は、さらに一・五km延びて九・五kmほどとなる。

(3) 室津まで引き返す時間はなかったか

次の問題は、黒い雲を発見してから、海が荒れ出すまでに、もとの室津港まで帰り着く時間がなかったかどうかということである。

室戸の漁業関係者にきくと、雲が出ても、雲足が早くなければ一日静かであることが多く、雲足が早ければ二時間か三時間ぐらいで荒れだすのが普通だと言う。あるいは、この場合は、特殊な場合でもっと早かったかもしれぬということも考える必要があるかもしれないが、これから吹く風が、前線による北西の風である場合だと考えると、くわしくは後に述べる理由から、そういうケースはない、と考えてよい。また「舟かへる。この間に雨降る。いとわびし。」という表現からは、雨は降ってはいるが、これは前線がはるか前方に降らす雨と考えられ、風や波がそんなに早く荒れてきた場合とは考えられない。この場合、貫之たちの船は出航後、一時間（もしくは一時間半）たっているとして、十分出発地まで帰ってくる時間はあ

り、舵取らは、そういう判断をして、直ちに船を返したものと考えられる。

なおこの「黒い雲」について、気象台の人にきくと、あまりこだわらないがよいという意見が多い。その雲が前線の前兆であると断言はできないという。私が漁業関係者にきいた話をすると、それは「経験によるもの」として聞くべきであろうという答であった。

前線の速度については、「気象の事典」に掲載されている昭和二六年三月六日の本邦の南方海上を北西から南東に進行するものの例では、毎時三五ｋｍとなっている。ちなみに、低気圧の速度は冬は四〇ｋｍ、夏は三〇ｋｍ、高気圧の速度は冬は五〇ｋｍ、夏は四〇ｋｍ内外と同書に出ていて、気団の速さのだいたいのことはわかろう。

前線の前方に雲を生じ雨を降らせることについては、前に述べたが、その距離については、寒冷前線ではなく温暖前線の場合が、「気象の事典」に出ている。それによると「活動的な温暖前線」では、前線の前方一〇〇〇ｋｍ辺には、高い空にすでに巻雲を伴い前線から五〇〇ｋｍ辺までは雲の底も低くなり乱層雲が垂れ込めて雨を降らせるという。おおよその状況は見当がつくといえよう。

貫之の船の舵取の見つけた雲が前線の前方に降らせる雨と関係があったとして、その雲と前線との距離は、右のように、たいへん遠いのであるが、その雲を発見した貫之の船との距離も相当あると考えられる。雲は水平線よりはある程度上方にあるのだから、天気さえよければ、視力があれば（船乗りは遠望がきくのが普通）少くも数十ｋｍ以上に達するであろう。

ここで重要なことは、久保田説の言う、北西の季節風が吹き出すのは、前線が通過して大陸からの高気圧がせり出してきてからであるということである。気象台の人の話では、普通半日ぐらいの間はあるだろうとのことである。これは私の推測であるが、日記の中の「黒い雲」とそのあとに出てくる「この間に雨降りぬ」という「雨」とを、前線が前方で起こす現象と考えた場合、それらの現象は、前記の温暖前線の例から考えても、かなり前線から遠い距離にも起こると考えられるので、前線の時速三五ｋｍぐらいとすれば、相当の時間の余裕があったと考えられる。

なお舵取らが黒い雲が出てきたので風が吹くだろう、船を返そう、と引き返したことについて、永年小型漁船に乗っている経験者たちにきくと、「この時吹く風は東（ないし北東）の風だから東海岸を北上するのは危いと考えて、引き返したであろう。西（ないし北西）の風なら、卯を回っておれば、引き返す必要はない。卯半島の東海岸は静かだからだ。」と言う。久保田氏も言っているように、東あるいは西の風の場合、卯を境として、はっきり海の様相は分か

れるのである。北西の風ならば、西海岸は風波が荒れるが、東海岸は静穏というのが普通であり、私自身何回か室戸岬に行って実見している現象である。漁業関係の人にきくと、沿岸三～四ｋｍぐらいは風はあっても波はなく十分航行できるとのことである。

今と千年昔では船もちがうし、船乗りの海や気象についての知識や航海についての考え方もちがうので、素人の私にはなんとも言えぬが、現在の室戸の小型漁船の人たちは、右のような見解を持っている。

なお参考までに室戸岬測候所にきくと、風の主方向は、二月は、西北西・北西・北東の順に多く、三月になると、この順位が、北東・西北西・北西に変る。貫之の場合は太陽暦の二月二七日であるから、ちようど両月の境目だから、西北西と北東の確率はほぼ同じと見るべきであろう。

それでは、問題をもとへ返して、前線が通過すれば、北西の季節風が吹くとして、それまでは、どんな風が吹くかという疑問が生じたので気象台の人にきいてみると、はっきりした低気圧なら、南か南東の風が吹く。その顕著なのは、春一番とか台湾坊主とかいわれる類のもので強烈な南の風が吹く。その場合は室戸岬は東岸といわず西岸といわず、海は真白くなるほど荒れる。それを土地の漁師たちはシラ（白浪と関係あるか）といって恐れる。しかし前にも述べたように、この場合は低気圧とは考えられない。「天候が崩れかけ前線が通過するまでの風は、特に顕著な変化はないのが普通である。」というのが気象台の人の説明である。

右のように、種々の角度から、日記の記事の気象条件を検討してみるに、もとの室津の泊りまでかえってくる時間は十分あったと考えられる。そして出発の時刻が、仮りに、前記の推定（五時、早くて四時半）をもっと早くして、午前四時ぐらいとしても、出航後二時間で、時速二ｋｍとして四ｋｍ、三ｋｍとして六ｋｍとなる（岬から室津の方へは下り汐になることが多いというから三ｋｍの確率はきわめて少ない）。前述（P 68）の如く航路を左（東）に転ずる地点まで約七ｋｍ（原池からなら八・五ｋｍ）と見て、出発時刻、速度の巾を大きくとっても、反転帰港する時間は十分あると考えられる。

二、白浜の港として機能

(1) 地盤変動と水位について

次に問題になるのは、白浜が貫之たちの船がはいることのできる泊りであったかどうかの点である。久保田氏が「御崎（みさき）の泊」だとする白浜の位置は、室戸岬の突端を東へ曲り、一八五ｍの海岸段丘の

切り立った岬半島の東海岸を、国道五五号線で、約五〇〇m北上すると、右手海測に、その形が烏帽子に似ている烏帽子岩という岩のあるあたりである。今〝ホテル・ニューむろと〟が建っている、その前の海岸である。さらに約二〇〇m北上すると左側に少し入り込んだところに御蔵洞という洞窟があり、僧空海の修行の跡と言われる。

その地形を見るに、室戸岬の突端部の海岸には岩礁が続き、観光の中心地である中岡慎太郎の銅像の前あたりは、さまざまな奇厳怪石が立ち並び、海中には多くの磯が点在して、その中の有名なのは白浜のすぐ北方のコビシャゴ磯・ビシャゴ磯である。白浜の現在の状況は、特殊な高潮の時は知らないが、平生は陸地になって砂浜、というより一面の岩礁地帯に、大小の岩が散在している。久保田氏の言うように、近年まで小さな釣舟程度は入れたかもしれないが、貫之の乗船程度の船が複数ではいることはできなかったと考えられる。では現在より水位が高かったどうか、という点を検討しなければならない。

まず室戸岬地域は地震による地盤変動の問題がある。沢村武雄博士の「南海スラスト説」によると、南海地震はおよそ一一〇年に一回の割で起こり、その場合室戸岬地域は隆起する。昭和地震(21年)には安芸地方の野根―安田と幡多地方の下田―月灘を結ぶ線を回転軸として、南上がり北下がりの回転運動をしてきた。南海の大きい地震は六八四年（天武13）の白鳳の大地震以来一九四六年（昭和21）の南海大地震まで、約千三百年の間に九回の地震があったと伝えられているが、初めの方のは記録も不確かである。一三六一年（正平16）以降は、ほぼ一一〇年に一回発生している。その中の記録の明らかなものは、次の表のとおりである。室戸岬の先端の隆起量を最高とし、東岸は北へ行くに連れて隆起量が少なくなり野根ゼロ、それより北は沈下となっている。土佐湾でも、室戸岬から西へ進むにつれて、隆起量が減って安田付近でほぼゼロ、それより西では沈下となる。（沢村武雄・「日本の地震と津波」・昭和42）　なお沢村氏によると、これらの隆起量は、次の地震までに三分の二程度は回復（沈下）するとのことである。右の表の三回の地震の隆起量の合計は四・四〇mで、その三分の二が回復するとすれば、差し引き三分の一の一・四三m、貫之の九三五年以降に、実質的に隆起したことになる。なお沢村氏によると、貫之の時代は、気温が高くて、（平均気温が三度上がれば、水位は五m上がるという）水位は今より一mぐらい高かったではないかと考えられるそうである。

南海大地震表

1707	（宝永4）	2.00m上る
1854	（安政1）	1.20m 〃
1946	（昭和21）	1.20m 〃

ちなみに空海の修行地の跡といわれる御蔵洞は国道の西側の山の横腹にある。この辺の国道の標高は五万分の一の地図によれば七―八mである。空海がここで修行したことは、かれの著作「三教指帰」等で信じてよい。この御蔵洞、今の国道の所は陸地であったと考えてよい。

さて右の沢村氏の説によると、地盤変動で一・四三m隆起し、高気温による水位の高さ一mを加えるとして、当時は現在より水位が二・四三m高かったことになる。他の地学関係の人に私がきいたところを総合すると、現在との差は、二～三m程度、多くても四m以内であろうという推定であって、沢村氏の見解と、ほぼ同じと考えてよい。前記の御蔵洞および国道の現在の高さからみても、この数字はほぼ妥当であろう。

右のように、当時より二～三m程度上がっているとしても、私の見るところでは、貫之の乗った大型船の複数が入り得るような地形とは考えられない。

そこで私はさらに実際に自分で船に乗って、貫之と同じコースをとって航海を経験し、現地を観察することとした。船は、室戸小型船主組合の好意で、小型漁船を出してもらうことにした。その航海の模様の概要を参考までに記すこととする。

(2)海上よりの観察――私の航海記

私がこの乗船の計画をたてたのは昭和四十七年十二月のことであった。最初の予定は十二月二十三日であったが、室戸地方は海上は風波があって延期、次の一月七日も同様で、何回か延期を重ね、実行し得たのは昭和四十八年一月二十一日のことであった。室津で十日間も空しく泊りを重ねた貫之の心境がわかる気がした。この間、私はテレビ、新聞の天気予報に絶えず注意していたが、その時のメモに記した四十七年十二月二十三日から一月十三日まで（新聞休刊日の一月一・二両日を除く）二十日間の高知新聞朝刊所載の二十回の、その日の天気予報欄の風浪についての予報の階級別は次ページのようである。

これでみると、高知県の沿岸では「波がやや高い」が普通ということになる。朝刊の分には「穏やかな方」というのは一回もないが夕刊に一回（一月二十六日夕刊「今夜穏やかな方」とあって、その率は二十日間の朝夕刊四十回分で、「きょう」と「あす」、「今夜」と「あす」と・それぞれ二回分出るので、機械的に合計八十回の予報と解して、ただ一回、じつに一・二五パーセントしか出ていない。ただし高知県は海岸線が長い（約二八〇km）ので、全般的に見て、波の高い所に基準をおいて予報を出すので、それより低い所はあるとのことである。しかし私たちが問題としている室戸岬方面は波の高いところだから、ほぼこの予報の水準と考えてよいと思う。

その日の前々日十九日の夜高知から室戸に電話で問い合せると天気予報では二十日から二十一日にかけて「室戸地方天候悪く航海に適せず」とのこと、さらに翌二十日早朝も同じような返事である。しかし私は船に乗れなければ陸上の調査だけでもするつもりで同行者二人とともに高知を出発、二十一日朝の天気に賭けた。明くれば二十一日、空はまず晴れである。後記室戸小型船主組合の組合長松本虎竹氏に岬の宿から電話すると「今朝は天気がよろしい、船を出しましょう」とOKが出て、室津港に集合した。

浪級		波高 m	相当風力	回数
風階				
1	穏やか	0 — —0.1	0 — 3.3	0
2	穏やかな方	0.11 — 0.5	3.4 — 5.4	0
3	多少波	0.51 — 1.25	5.5— —7.9	6
4	波がやや高い（小型漁船は注意）	1.26 — 2.5	8.0 — 10.7	8
5	波が高い（船は注意）	2.51 — 4.0	10.8 — 13.8	5
6	しける（船は警戒・波浪注意報）	4.01 — 6.0	13.9 — 17.1	1
7	大しけ（船は厳重警戒・波浪警報）	6.1 — 9.0	17.2 — 20.7	0
8.9	猛烈にしける	9.01 以上	28.8 以上	0

この海上調査の航海には室戸小型船主組合長・室戸漁業協同組合理事・松本虎竹、室戸小型船主組合副組合長・室戸漁協監事・山川駿馬両氏が乗組み、船主の松本氏が船長、山川氏が機関・操舵を担当された。同行者は他に山木武雄氏ら四名、私とともに総計七名。

乗船した船…船名…福繁丸。トン数…三・七トン。三五馬力。

船長…九・二m　巾…二・二m、深さ…〇・八五m。

航行計画は、室津より西方「土佐日記」の奈半利（約二一km）まで行き、奈半利から引き返して、こんどは貫之たちと同じ方向に、もとの室津へ向かい、もし岬回りの可能な状況なら、岬回りを決行しようということになった。

天気は晴れ、薄雲がかなりあり、風が寒いが海面は穏やかで船は行きは七・五ノット（毎時一二・九km・註一ノットは毎時一海里＜約一八五二m＞）の速力で走る。この日室戸岬測候所の観測では「午前九時、風向・速　北東九m」ということであった。午前九時五分室津発、奈半利着十時二〇分。まもなく室津へ引き返す。速度四・五ノット（毎時八・四km）、貫之と同じ方向になる。羽根一一時一〇分、行当岬一二時三〇分、ゆきは少し沖の方を速く、帰りは岸に近くゆっくり航行した。室津着午後一時ごろ。室津―奈半間についての詳細は割愛する。

私どもは上陸して昼食をとり、海上の状況は、松本、山川両氏が

少し東の風があるが岬回りはできると判断され、いよいよ決行することとなり、午後二時二〇分出航した。

室戸岬半島の西岸を、海岸から約三〇〇～五〇〇mぐらい離れて南南東に向かう。室戸岬測候所調べでは、「午後二時の風向・速は北東一一～一二m」であった。かなりの風である。しかし、まださしたる波はない。左手には八〇mぐらいの海岸段丘式の山なみが単調に続く。海岸には岩礁が続き一ノ碆・石ノ碆・手斧碆などの碆が現われる。約三kmで津呂の港の前を通りすぎる。だんだん岩礁が多くなりスカイラインの登り口を過ぎ、岬突端に近づき、山上の灯台が見えてくる。船は岩礁にぐっと近くへ寄ると釣をしている人々の姿が見える。船は岬南方の岩礁の先端から一二〇〇～一五〇〇mぐらい南方から東方に転じ、岬突端の真南を通るころから波が立って船が揺れ始めた。そして岬の正面をすぎ船首を北東に転じると、ますます波は高くなり、波頭が砕け始め、所々に白波が見え始めた。船の動揺は激しくなり、しばしば波しぶきが船内にはいるようになった。操舵の山川氏は機関室のすぐ後方におり、他の人々は機関室の付近か、その前の舳の方にいて、何かにつかまって船の動揺に堪えていた。ちようど、問題の白浜（ホテル・ニューむろとが目標になる）前方、の二つ碆辺にきた。白浜の前面はずっと岩礁が続き、打ち寄せる波が白く砕けている。私は写真を撮影するのに好都合な舳の方にただ一人いた。船の最後尾の所である。一mぐらいの小さい柱があり、その下に低い箱があったので、その箱にまたがり、柱につかまって、視線を白浜の方にずっと向けたまま動揺から身を守っていた。その時、白浜の方向に白い波頭が見えたので、すかさずカメラを向けてシャッターを切った。ちようど、その時船は大波を食って激しく揺れ、そのはずみに私は後方に投げ出された。柱を抱きかかえるようにしていたので、体は船内にとどまることができたが、あと一尺ぐらいですんでのところ冷たい海中に投げこまれるところであった。当日の海上気象は、「午前九時・午後二時ともに風浪階級3（風向・速は前記のように午前九時、北東九m、午後二時、北東一一～一二m）（室戸岬測候所調べ）である。風浪階級3は前出の表（P75）のように、「多少波、波高〇・五一～一・二五」である。測候所の説明は、「やや波がある、細い白波がある」ということである。前出の表によると、「相当風速は五・五～七・九m」となるが、この日は風はそれより強いということになる。なお右の「風浪階級3」というのは、「室戸岬測候所から見て北東方向（三津・高岡沖）3」ということである。

私たちは、この波の高さを、大きいのは一・五mぐらいでないかと話し合ったが、松本氏は一mぐらいという。私は波が高いので、いささか心配になり、松本・山川両氏に漁船に乗った経験から、現

在の波はどの程度の波かときいてみたところ、「これぐらは普通である、カツオがよく釣れる波の程度」ということであった。船は北北東に進んで行くが、依然として揺れる。はじめは岬沖から一一kmの三津港沖まで行く予定であったが、高岡港沖の近くまで行った辺から引き返すことにした。

しばらくエンジンを止めると、あまり揺れない。方向を転換し、北東の風を横に受けるときはかなり揺れる。かくして帰路についたが、帰りは行きよりも沖の方を通ったが、動揺は行きより少なかった。しかし岬の前面までは波があり船は揺れた。岬の沖をはずれて西海岸の方にまわると急に海は静かになり、無事母港室津の港に着いたのは午後四時であった。往復とも速力は五ノット（毎時九・四km）。片道約一〇kmを一時間四十分で往復したことになる。なお上り汐下り汐に関して松本氏は「最近は下り汐（岬から室津の方への）が多いがきょうはごく弱かった」と言っておられた。

私どもは、この岬――土佐ではオハナという――回りをして実地に学んだことは、まず第一にオハナ回りは昔から難所で船が揺れるということを身を以て体験したこと、第二は、東の風の時は、東岸が荒れ、西岸は静かだということをマザマザと見た（この逆もまた真である）。第三は貫之当時水位が若干（二～三m）高かったとしても、このように岩礁の多い白浜に安全に入港することは至難であろうと痛感した。

(3) 白浜についてのまとめ

以上のようにして得た材料によって白浜についての、私の考えをまとめると次のようになる。貫之当時水位が二～三mぐらい高い場合を想定しての判断である。貫之の時以来の記録に残らない地震による降起等が若干あったとしても、この結論を変更せねばならぬほど著しいとは考え難い。

一、地形からいっても、かなり大型の船が複数で入り得る場所ではない。

二、白浜は衆落史の上から言ってきわめて新しい。風待ちする所として、船乗りに知られていた土地とは考えられない。よほど接岸しない限り、碇泊に適するか否かはわからない。安全性をよく知っている所でなければ船を入れることはないはずである。しばしば述べたように岬突端から白浜、ビシャゴ磐にかけては海岸には岩礁多く、海中には磐や暗礁が多く安全に接岸することは困難である。古代の航海の記事を見ても、何よりも安全第一で冒険を避け大事を取っていることがわかる。そのような危険性のある所を選ぶとはとうてい考えられない。

三、貫之が一月二十一日、いよいよ待望の岬回りを果たすその日の出航状況の「皆人々の船出づ。これを見れば春の海に秋の木の葉

しも散れるやうにぞありける。」という記述から、貫之らの大型船複数を含めて、多数の船が風待ちできる広さを必要とするが、白浜はとうていその条件を満たすことができない。これはすでに萩谷氏、山本武雄氏によって指摘されているとおりであって、この一点からでも白浜説の可能性はまず考えられないであろう。

三、月の問題について

さて一月十七日ひとたび出航しながら、引き返して十八、十九、二十と三日間、風波の静まるを待つ。そして二十日、天候悪く船の出ないのを嘆き、国府出発以来の日数を指折り数える。いとわびしく、夜は眠れない。そして問題の二十日の月が出てくる。

山の端もなくて、海の中よりぞ出でくる。

このような光景を見て、昔安倍仲麿という人は、と仲麿の故事を説明して、仲麿の作った歌を記している。ただし、原作は「天の原ふりさけみれば……」とある「天の原」を「青海原」と改作している。そして「ある人（日記の作者貫之のこと）」のよめる歌として

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

久保田氏はこの「（二十日の夜の月）が山の端もなくて、海の中よりぞ出でくる」という文章と、和歌の、都では山の端に見た月が、ここでは「波より出でて波に入る」ことを重視して、白浜説の三つの根拠の一としておられる。

室津港の東方は（北東も南東も）半島の山なみでふさがれている。岬の突端は一八五m、つづいて北に尾垂山二三〇m、四十寺山三一三mとかなり高い山が続き、港のすぐ東方には城床山（八五m）がある。

貫之の碇泊した地点を、古くからの内港の東北隅、マイゴの井戸付近とすれば、月は普通東方の城床山の稜線に出る。原池説の場合でも、やはり右の半島の山々の続く山なみに遮られる。昭和四五年旧一月二十日（高知地方の月出二二時二七分・月入八・一五）の月の出を観測した記録が前記山本氏の論文に出ている。それによると月の出は、

室津港後免（室津内港の東南に続く地区）で二二時一六分城床山東稜線から。白浜ではホテル・ニューむろと前で、太平洋上より二一時四一分。津呂港では二三時〇五分前原山東稜線より。室津・津呂は碇泊中の船は位置が低くなるので、右よりやや遅れる）

（注）なお昭和三一年三月二日（旧暦一月二十日）の月の出は二三時三四分。

室津と津呂が、時刻が遅れるのは、山の上まで月が上る時間がかかるので当然のことで、津呂が室津より遅いのは山が港に迫っている

るからと考えられる。私は、この問題にぶっつかってから月の出と月の入りの方角に注意しているのであるが、まず東から出て西へ入る、と大ざっぱに考えてよいようである。若干東もしくは西から南北に振ることはあっても、さほど著しくはないようである。ただ月の出入を観察するには、東も西も開けている地形であること、天気の良いことが条件であるので案外実際に確認することは、むずかしいし、人々にきいてみても、即座に満足な答えをくれる人は稀である。特に月の入りの場合は、たいてい夜中から明け方のことが多いし、有明の月になると、日が出ると月の姿は認めがたくなるので、なかなかその地点を確認するのはむずかしい。また貫之当時と今とでは、多少違っているかもしれないが、ここではそれは考慮に入れないでおく。

さて月は、室津の場合、直接海から出ることは絶対にない。それを、なぜ貫之は「海から出る」と地の文でも、和歌でも、書いたのか。こういう問題を提起したことは、たしかに久保田氏の功績であると言わねばなるまい——月の問題にどれだけの比重をおくかは別問題として。

月の問題については、フィクションだとする萩谷氏の説がある。その要旨は、「仲暦の場合十五夜であるのを二十日夜と改め、歌の第一句『天の原』を『青海原』と変えるなど、ほしいままに脚色しているのだから、山から出る月の出を、海からに、置きかえるぐらいは朝飯前であったであろう。歌論的主題を扱った個所は、ことに戯曲的に構成されたフィクションに富んでいるからである。」というのである。

私も、十五日を二十日に改めた点に問題を感じる。貫之は、なぜ十五日の夜仲暦の故事を引かなかったであろうか、という疑問がまず湧いてくる。十五日は天気が悪く、月は見えなかったからであろうか。十五日の「…なほ日の悪しければゐざるほどにぞ…」は、日の吉凶ではなく、天気のことと私は解する。とするとこの日は曇りもしくは雨で、月は見えなかった公算大である。しかし、日記のそのあとの文章をみると、「人々海をながめつつぞある」とあり、雨の降っている場合の動作としては、ふさわしくない。あるいはこの「日悪し」は雨天（曇天）の意ではなく、風浪のことかもしれない。そのあとの歌、

立てば立つゐればまたゐる吹く風と波とは思ふどちにやある
らむ

と、風が吹くと波が立つと言っているし、ますますその感が強い。あるいは、この夜は月が出たかもしれない。

翌十六日は、「風波やまねば、なほ同じ所に泊れり。」と、はっきり風浪のためと記していて、波の立つのを見て、「箱だにも」の歌

をよみ、白波を雪にたとえている。この日も夜、月が見られた公算は大である。とくに十七日早暁「曇れる雲なくなりて暁月夜いとおもしろければ…」とあるから、前夜十六夜の月が見られた確率は高い。

p66の表のように十七・八・九の三日間は天気が悪いと解される。二十日は「きのふのやうなれば、船出ださず」とあり、はじめ天気が悪かったが、回復して月が出たであろう。翌日、船出しているところから、そう判断してよい。

二十日に月のことを書いた理由は、第一に当日夜天気が良くなったことであろう。しかし私は、それが十七日以後であることに、重大さを見いだす。十七日せっかく彼は良い日和に出会って船出するが、にわかに黒い雲が出てきて、引き返すのである。安倍仲麿の故事を引いたモチーフは、一度船出しながら故国——三笠の山のある——に帰り得なかった仲麿に対して、同じシチュエイションにあるものとして深い共感を覚えたことにあるのではないか。天候が回復して二十日の月を見て、仲麿の方の日を自分の方に合わせたのである。自己の感懐を、むしろ、仲麿に託したのではないか。そう思って読めば、

帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。

という条は、貫之が大津で受けた、土佐の国人の惜別のさまを彼が記した文にそっくりではないか。彼は数奇な運命の先人の不遇を悼みながら、自らを、ドラマチックな先輩の悲境に比して、ロマンチックで感傷的な心情にひたっていたのではなかろうか。彼の眼前の土佐湾は波涛万里の東支那海にひろがっていった。彼はいつしか渺茫たる大海の中にいるかの感にひたり、波より出でて波に入る月を感じたのではなかろうか。

私は現実に立ち戻り、室津の港のほとりに立つことにしよう。内港の東北端マイゴの井戸のほとり、NHKの室戸通信部のあるあたりから、港にそって南から西へまわっていくと、私どもが岬回りを試みた時船出した波止場に出る。ここから東方へ、新しく出来た外港が広がっているが、ここに立つと、ちょうど貫之のころはマイゴの井戸の所から（海の方には障屏物はなかったはずだから）四方を眺めたのと同じような感じであったと思われる。東から南には、あまり高くない海岸山脈がずうっと岬まで続いている。岬の先端は海にとり囲まれている。西には室戸岬によく似た行当岬の一二〇mの段丘が馬のたてがみの如く突き出し、奈良師・元の海を抱いている。北は室津川の川尻が広がっている。（室津川の川筋は、内港の東端のあたり、「水尻」という部落のあたりに流れていたのを、近世の初め野中兼山・一木権兵衛らが室津港を開鑿した時、西方の今

の川筋につけ変えたと言われる。）潮が満ちてくれば、この川尻は入江のように水を湛えたであろう。（昭和三一年三月二日＜旧暦一月二〇日＞の月の出は前記のように、二三時三五分、満潮は二一時五〇分である。）貫之は自ら、海の中にいるかの感じを抱いたのではなかろうか。私自身室津港のほとりに立つと、いつもあたり一面、海の中にあるような感じがする。月の出る城床山も海の中にあるという感じなのである。城床山の稜線を出た月は、山は高くはないから、月の位置も高くはなく、月光は海面に輝き月の出という感じは、十分あるであろう。――

山本武雄氏は前記論文（P10）の中で、

「…京都も国府も周囲を山に囲まれていたものが、むろつの泊りは、山は背後の山なみのみで、広い視界が海であること…、（仲麿の故事に関連して）多分に修飾的なものがありはしないか。」

と言われている。私も全く同感である。

月についての記述は、月の入りの場合であるが、一月八日大湊滞在中の文に出てくる。

…こよひ月は海にぞ入る。これを見て業平の君の、「山の端逃げて入れずもあらなん」といふ歌なん思ほゆる。もし海辺にてよまましかば「波立ちさへていれずもあらなん」ともよみてましや。……

この八日の月が海に入ったかどうかについては、萩谷氏が問題とされているように疑義がある。前にも月の出、月の入りの方角について述べたように、私の観測では大ざっぱにいって、東から出て西へ入り、南北に振っても四十五度ぐらいが限度のようである。萩谷氏は、「大湊と推定される前の浜から西南西二四二度の方向一〇kmの地点に桂浜で知られる竜王岬があり、その延長線上には一〇〇〇mを越す山々が伊予と土佐の国境の山脈を形成しているから、大湊からは水平線に沈む月は見えなかったものと思われる。」と言っていられるのは正しい。竜王岬は私の計り方で言えば、大湊から西方より南へ二十三度ぐらい振っている。ちょうど西南西に当る。ところで、もし海へ入るとすれば足摺岬のはずれということになり、西より五十五度も南に振ってしまい、その方向に月の沈む可能性はまずないと言ってよい。では、これをどう解釈したらよいであろうか。

右のように、事実、伊予との国境の一〇〇〇m級の山の続く四国山脈に入っていることは、まちがいない。しかし、大湊と山脈との距離は約八十kmあるから、その山なみはずっと低く見える。そしてその間には海が横たわっているのである。そしておそらく目の届く限りの果ての水平線（といっても実際はその上は陸地であり山であるが）の上は、山か雲か霞かわからずぼうっとかすんでいるであ

ろう。山脈か、普通はおそらく雲海に月は入るのであるが、それが低い場合は、海面には月光が映じて、あたかも海に入るかの如き感じがするものである。厳密には錯覚というべきであろうが、その感じは真実のものであるといわねばなるまい。私は宇野・高松間の国鉄の連絡船で瀬戸内海を渡ることがあるが、その時、これは月ではなく太陽であるが、しばしば同じような経験をする。これは昨年の五月なかばのことであるが、午後六時半ごろ、高松発の連絡船が宇野に近づいたころ船の進むにしたがって太陽は、西方の島か岬かわからぬ山（何れもあまり高くない）の高さに連れて動いて行き、低い山の所では、西の空の赤さの波への反映が強い。もう西山に沈むかとみると、山と思ったのが雲であって、まだ沈まない――という経験をした。この場合も、事実は山か雲かに沈むのが、まるで海に入ると感じるのである。同じような経験は、西明石と姫路との間の新幹線の車窓から南方瀬戸内海の落日を望むときにもよくする。

前にも記したように、室津から岬の突端にかけては、岬半島そのものが海に囲まれていて、岬半島の山は、室津、津呂辺よりは高いが、前にも書いたように灯台のある辺で一八五m程度であって、私はここを訪れるたびに、なんだか海の中にいるような気がする。特に室津は、室津川の川尻が開けているし、室戸岬、行当岬の展望もよく、一方だけは山があるが広々とした感じがして、見港す限り海という感じがする。貫之も、きっとそう感じたにちがいない。一度出航しながら出戻りしたことの共感から仲麿の故事を引き、それが右のような実感と結びついて、このような表現をとらせたのではあるまいか。

ところで、久保田氏は、「月が波から出て波に入る」のは、岬のあたりではここしかないと白浜を挙げられたが、この地が、月が波から出るのは疑う余地はないが、じつは月の入りについては疑義がある。というのは、地図（二万五千分の一がよくわかる）を見ると気がつくが、白浜の西側には国道が岬半島の山麓を走っているが、この山はしばしば述べたように海岸段丘で海岸からほとんど直角に立っている。そして、その山の線は岬突端東角（中岡慎太郎の銅像の辺）に向って南北の線に対して二六度ぐらいの鋭い角度をなしている。（第一図参照）だから白浜（ホテル・ニューむろとの辺）からの線は南西よりもぐっと南に振って、南南西といってよい角度になる。月の入る方角は西よりやや南北に振ることはあるが、南西より南に振ることはないといえる。（p79 p81参照）月は海へは、はいらない。岬半島の山に入ることになる。事実、私が調べてもらったところでは、この地に住んでいる人の話では海にはいらないとのことである。

室津には直接関係はないが、同じような問題が高知市浦戸港入口

の月の名所の桂浜にある。この桂浜に土佐出身の明治の文人、大町桂月の歌碑が立っている。その碑には、「みよやみよみな月のみの桂浜海のおもよりいづる月かげ」という和歌が刻まれている。桂月という雅号は、桂浜の月にちなんだものである。ところが、この歌詞について、「桂浜からは海から出る月は見られない。山から出る。」ということが高知の人々の間でささやかれている。事実、中秋の名月が海からでなく山から出るのを私は見たことがある。地図で、室戸岬の突端の角度を計ると、真東（安芸市安芸町がちようど当る）より三〇度南に振って、東南東に当る。月は安芸平島（旧安芸郡に当る）の山々の上から出ることになる。しかし、前記の貫之が、大湊から西方の桂浜の方角に一月八日の月の入りを見た時と同じように、山なみは低く見え、その手前には広い土佐湾が遠く続き、海面は銀波に輝き、桂月の詠んだように、海の面から出るかの如くに視覚には映ずるのである。われわれは、物をみるのに、機械で計るのではない、赤外線やX線で見るのではない。肉眼で見るのであり、生きた人間の感覚でみるのである。複雑な作用を持った心情で見、気分で享受するのである。それは事実に反するから不実であり、歪曲であり、虚構といわれるかも知れない。意識的な目的的なフィクションといわれるかも知れない。しかし心理的心情的には真実である場合もある。それはプラスとマイナスの如く、相反するものでなく、同じプラスの方向で、量的な誇張というべきでないか。潤色といってもよいであろう。室津の月の出のシーンは多分に仲麿の故事に合わせるための脚色と考えられるが、それは作者のその時の生きた感覚と心情につながるものと考えるべきであろう。——そして室津の地理的状況は、そのような感覚を起させる条件を持っていた、と。

四、景色の問題

（一月）十八日なほ同じ所にあり。海荒ければ、船出ださず。この泊り、遠く見れども、近く見れども、いとおもしろし。かかれども苦しければ、何ごとも思ほえず。

久保田氏は、「五日間も舟泊りして、そのつれづれに見飽きている室津に帰って、こんなにも美しさに驚いているようなことを書く必要があろうか。第一室津の泊りはこんなように書かれる名勝地ではないことは万人の認めるところである。今日の国定公園室戸岬こそ、この書簒にふさわしい遠景、近景の美を合せた景勝地ではなかろうか。（前出、土佐史談）」と、㈠こと新しく言うのはおかしい、㈡景色はすぐれてはいない、という二点で室津を否定している。

㈠について、景樹は、久保田氏と逆に、「朝夕なれくるままに」

景色のよさが次第によくわかり、見れば見るほど良い、と、とっている。たしかに、「遠く見れども、近く見れども」という表現は、「どうみてもなかなかよい」と、動作のくり返し、経験の集積を示唆すると、とることができる。三谷氏は、「景色はよいが、長逗留に飽き果てて、なんの感興もわかない。」と長逗留の方を強調している。

このように、逆の場合も成り立つから、キメ手にはならない。しいて、この日に、景色が出てきた理由、裏を返すと、これまでなぜ出てこなかったか、考えてみよう。十二日は、大湊以来の船旅の疲れと、「ふんとき・これもち」の船の遅れたことに気を取られた。十三日は、朝は雨であった。十四日も雨。十五日も天気が悪い。十六日も風浪に妨げられ滞留、最大の難所の御崎回りのことで頭はいっぱいである。十七日は出航して逆戻り。と、これまでは、景色に関心を示す機会がなかった。この日は海は荒いが、眺望は利く。気持ちの上でも、きのうの出戻りで、あきらめ的になる。そして景色のよさが、目につくが、船留めされる不如意な海の旅の苦悩に圧倒され、文学的感興は起こらない。――こう考えれば、十八日に景色のことが出てきた説明がつくのではないか。

(二)に入る前に、一つの問題がある。右の文中の「遠く見れども、近く見れども」の遠く・近くは、(A)「遠くを・近くを」か、(B)「遠くから・近くから」かで、古来両説あって、定まらない。(A)…景樹(創見)、大秀(解)、三谷(角川文庫)、鈴木(大系)。(B)…池田(学灯文庫)、臼田(福音館文庫)、小西(精解)、松村(小学館)。私は、どく単純に、遠くを、近くをだと考える。「から」とすると、近くから見れば、その問題の個所と、それを取りまく近くの景色であり、遠くから見れば、構図が大きくなるが、しかしそれは、その問題の個所の景色というより、その周囲の景色の比重が大きくなる。遠くをと、とればその遠くの景色が直接対象となるのであって、論理的に事態はずっと明快になる、を、からのいずれにしても、その問題の場所とその周囲の近いところと、周辺の遠い所の二つの風景、眺望ということになる。

しかし、ここで念のために、をとからの二つの見方をして室津・白浜・津呂の三所について見よう。

(1)室津　まず室津であるが、「月」のところで大体は述べた(P80)ので、少し重複するが、その全貌を私は前記の海上観察の際、港外から眺めた。右方室戸岬から続く低い海岸山脈の山なみが、室津川の河口で切れて、山なみは、はるか後方に下がり、室津川の河尻が扇形に広がる。右手の段丘の切れるあたりに、室津漁業無線局のたっている城床山(八五m)が、筆の穂をたてに割って根元を右にしてねかせたように横たわり、その尽きるところ、左手(西方)の

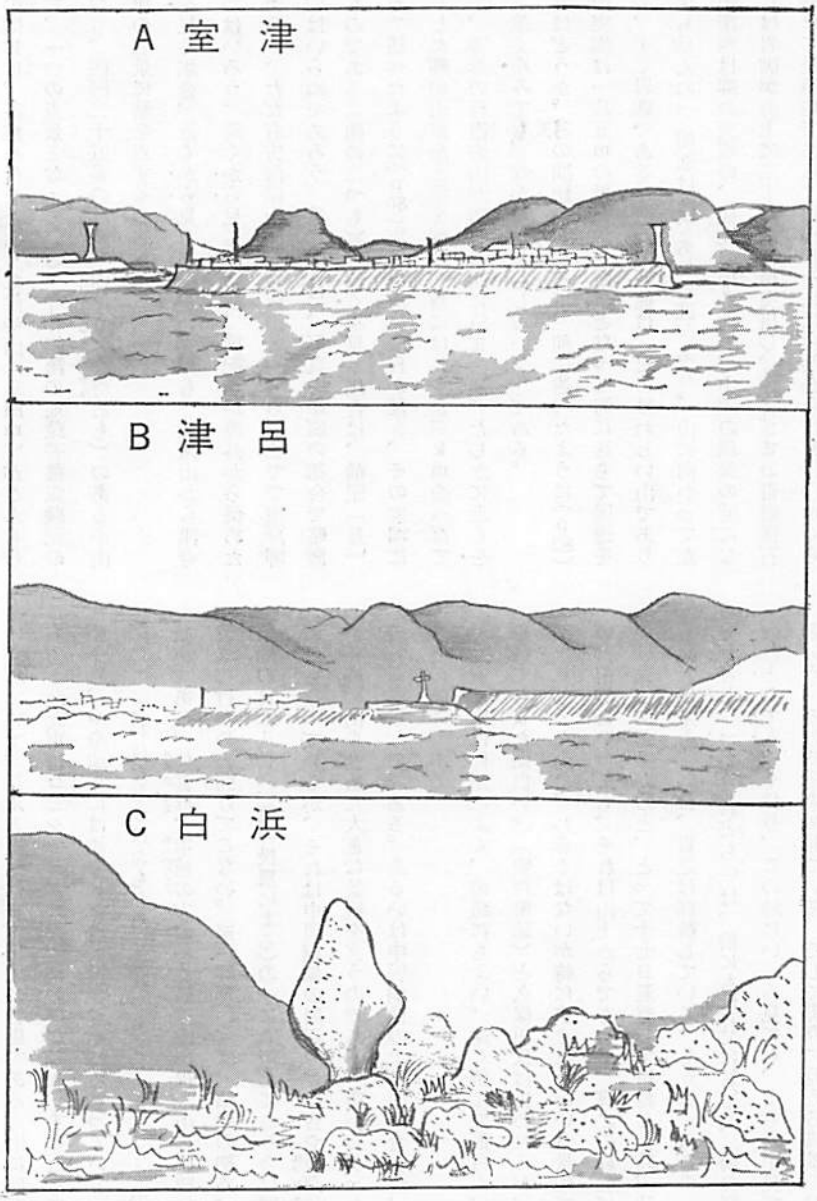
山々との間には、茶椀を伏せたような津寺山（三四m）がこんもりと坐って、一つの点景となっている。今昔物語の地蔵菩薩霊験記の舞台となり、四国二十五番の札所、津照寺（津寺とも）のある小山で、室津の風景に睛を点ずるの感がある。

近くを見る場合、近くから見る場合、いずれも、城床山から津寺山までがはいろう。遠くから見る場合は、前記私が港外から眺めた景色に当ろう。ただ右方海岸山脈は城床山の次ぐらいまでで室戸岬までは、はいらぬであろう。第二図Aは、写真を印刷の都合で略画としたものである（他の二つも）。遠くを見る場合は、前記「月」のところで述べたように（p80）東には海岸段丘が続き、その突端にすっきりした岬の山が海と空を画し、西にはわずか三kmをへだてるのみで、菱形の行当の山が指呼の間に望まれる。たしかに近くを見ても、遠くをみても、なかなかおもしろい景色である。

(二)白浜はどうか。月の問題のところで、前に述べたように（p82）岬半島の突端は一八五mの段丘が、断崖となって海に落ちて国道をへだてて、すぐ岩礁である。白浜の西側は、そのけわしい山であり他には何も見えぬ。前面は海であり岩礁がある。山に向かって左方――南南西は岬の突端の、観光の中心地で、中岡の銅像の前になる。ここは岩礁が海上に二―三〇〇m突出し、さまざまの奇巌怪石に波が砕けて景勝地である。しかしそれは白浜からは五〇〇mぐらい離れていて、見える範囲はまず普通の岩礁である。山に向かって右方―北北東はコビシャゴ、ビシャゴの砦が続き、すぐ近くには烏帽子岩、やや遠くには通称ビシャゴ岩が、そびえ立っている（第二図C）。これはたしかにおもしろい景観である。しかしごく単純で、狭小である。佐喜浜、甲浦の方の長く続く海岸線や山の眺望は高岡港まで行かぬと開けてこない。室戸岬といえば、昭和の初め、毎日新聞の日本八景（一般の投票による）の一に入選しており今は国定公園ともなっているが、それは中岡銅像の周辺や、灯台や最御崎寺のある岬の山を含めた大きな景観を言うのである。空からとった写真で見る風景なのである。あるいは中岡銅像の上の展望台とか、灯台からの眺めである。

「室戸岬は仰望によく、俯瞰にもよい。遠く望んで面白く、近くを見てもまた面白い。」（室戸町誌）と久保田氏は言われるが、仰げばきり立った山で、わるくはないが特にすぐれたという景観ではない。俯瞰といっても、それは山上からであって、貫之の経験にはない。遠くを遠くからと、とって十七日避難して寄港した時、遠くから見た風景とすれば、貫之は経験している。しかし、ここの「遠く見れども、近く見れども」は、前にも触れたけれど、前の経験は含むとしても、やはり、この時にいくら見ても、どちらを見ても、という、その時実際に見ている、そして実際に見える風景でなけれ

第二図　室戸三泊地粗描



ばならぬ。この日の、今眼前の風景でなければならぬ。私は、これまで遠くから近くからの場合も含めて、論を進めてきているけれど、ここの文の勢は、この時実際に見ての感動ととらねばなるまい。対句式の言い方からしても、遠くからは十七日に見たというような時間的食いちがいは許されぬ、同時経験でなければならぬ、もっと緊密な表現だと私はとる。

白浜からの視界は前記、山と海と岩礁に限られ、それ以上遠くは地形的に何も見えない。もちろん、鳥帽子岩などもあり、第三図のスケッチのように、それはそれなりによいと言えないことはない。しかも白浜自体小さく、視界も狭く、遠くから見たとしても、「いとおもしろし」というほどではない。現代いろいろの場所や角度から見た景勝地室戸岬像（中岡銅像付近を中心とした）と白浜自体の景観とを混同しているのではないだろうか。

㈢　津呂は、東方は八〇m程度の海岸段丘が、所々に谷間はあるが重なって、岬突端まで続き、津呂港の国道（「貫之舟泊の碑」辺）からみると、あまりにも山が迫ってきており、かつ山なみの姿は単調で、山に向かっても、右の岬の方も、左の室津の方も変化に乏しく景色が良いとは言えない。第二図Bは海上から見たものである。遠くを見る場合も、岬の方は清水孝之氏も指摘されている（「近世の航海資料より見た土佐日記の海事について」、愛知県立芸術大学紀要昭和47・3・13）とおり近すぎて、岬の手前の山が重なりすぎて長く突き出た感じがなく、おもしろみがない。ただ西方行当岬は、室津からと同じように見えるが、室津からは岬の突き出た段丘の横から見る姿がきれいなのに、津呂からは斜めになり、室戸岬の方は近すぎるのと逆に、行当岬は遠すぎて（室津から三km、津呂から六km）、その趣ははるかに落ちる。津呂は、遠くからみても同じで第二図Bのような感じである。

元来景色の良さなどというものは、多分に主観的な要素が多いものであるが、できるだけ現実に忠実に私の所見を伝えようとした。右のように見てくると、やはり室津の方が、一番条件に叶っていると考えるべきであろう。かくいう私も室津を天下の絶勝などと言っているのではない。私は室津の景色が特にすぐれているとも思わない。しかし貫之が、ここで室津の景色を良いと感じてほめたのは、どうも、かれの主観的な心理体験も関係しているのではないか。すなわち、かれがこれまで滞在した大湊・奈半と比較して、かれは「いとおもしろし」と感じたのではなかろうか。大湊は――前の浜説によるとして――物部川の河口港で近くに山もなく、わずかに海岸に松林を想像できるぐらいで、はるか北方に香長平野のかなたに四国山脈は見えるが、その所自体は何の変哲もない港である。奈半も奈半利川の河口港と考えて、川尻はかなり広く開けていて、両岸に

奈半利・田野の山はあっても遠く低く、さしたる景観をなしておらず室津の津寺山のような山もない。この二者を見たあとで見た室津の泊りの風景は近くも遠くも変化ある、おもしろい風景と甚之の目には映じたのであろう。

五　室津と津呂

室津（牟呂郡）の名は、和名抄（成立九三五）に安芸郡の郷名として載っていることは有名である。これより先、延喜式神名帳（成立九二七）に室津神社の名が見える。やや下って、今昔物語巻一七の第六・地蔵菩薩値火難自出堂語には、「今ハ昔土佐ノ国ニ室戸津ト云フ所有リ」とある。今昔の成立は一〇七七年といわれるが、この話の典拠となったという実叡撰の「地蔵菩薩霊験記」は、一〇三三年からまもなくのころ、まとめたものと考えられている（遠藤元男・国史文献解説）。この室戸津は室津であることは疑いない。なお山本氏が前記論文で挙げている、続日本紀・称徳天皇神護景雲元年（七六七）安芸少領凡直伊賀麿が稲束二万束他を献納している記事、近世土佐の国学者谷秦山著「土佐国式社考」の室津神社の項に右の凡直氏の子孫が室津の別府（少領）と称して室津城にいたという記事がある。右のことから室津は古くから集落をなし政治経済の一つの要点をなしていたと考えられる。

これに対して津呂の名は、近世の初頭に到って初めて現われてくる。山内氏が関ケ原の役の後土佐に入り、参勤交替の制も出て、上方との海路交通が頻繁となり、甚之当時と同様に、いつも室戸岬の風浪に悩まされるので、避難港の必要性を痛感した。唯一の風待ち港として室津の港があったが、入口に大きな磐があって出入に障害となった。そこで室津と岬の中間にある津呂（室津から三km、岬から二・五km）を開鑿し、なおそれだけでは狭いので室津を開さくした。土佐藩の執政野中兼山と普請奉行一木権兵衛らにより、長年月にわたり、幾度か中絶しながら莫大な物的人的の犠牲のもとに津呂が一六六一年（最勝坊が手をつけてから四三年）、室津が一六七六年（同じく四六年）に竣工した。

室津・津呂の開さく前の状況をうかがうことのできる文献がある。一つは室津についての谷真潮が、一七七八年浦奉行となり、東部海岸を巡視した紀行文「磯わ（回）のもくつ（藻屑）」（高知県立図書館蔵）に「…室津の湊ハ延宝五年にはしまり七年になれり元親主の時の地検牒池の廻り壱町九段廿四代と有小舟入池有しと云…」とある。現存の長宗我部地検帳（一五八七検地）にも「池のマワリ壱反廿代以下「池ノブチ・池ノ東南」などホノギ（田畠の小区画のこと、小字程度）の名に「池」と書いてある。小舟のはいる池があ

って入口が海に続いていたと考えるべきであろう。

これに対して、津呂については開さくの顚末を野中兼山が書いた「室戸港（湊）記の中に、「…岩間石ヲ畳ミテ以テ之ヲ填補セバ、以テ西風ヲ防グベシ、幸ニ釣舟出入之渓有リ、尤モ湊ト為スベクノ処也（漢文）（高知県文教協会・野中兼山関係文書・昭和40）とある。渓（ケイ）は「水の曲り入りたる岸べ。隈。崖の湾入せる所」と辞書にはある。水が岩の間にはいり込んだ地形を言うと考えられる。前記の室津の「小舟の入る池」と「釣舟出入之渓」と比べると室津の方が大きいと判断される。

前述の如く、津呂は近世の初めまでは存在を示さない所である。貫之のころ、大型の船の複数を入れるような冒険を、慎重な航海ばかりする当時の船乗りが、敢えてするとは、とうてい考えられない。なお現在、港に階級づけがあるが、室津は運輸省所管の港湾（地方港）で地図の印は⚓、津呂は室戸岬港といい農林省所管の漁港（第三種）で印は⚓となっている。「月」、「景色」の問題は、その項で述べた。

なお津呂港を室戸港とし、「土佐日記の室津の泊りは、室戸港であり、津呂港である」という誤りは、前記兼山が津呂の開さくの顚末を記した文を「室戸港（湊）記」と題したことから起ったと考えられる。さらに古代から、室津の津と戸は音が通ずるところから、現在の私の判断では室津・室戸（三教指帰・今昔物語等）の両方が通用し、かつ室戸の方が広い範囲（岬から行当辺まで）の場合に使われたらしく思われる。

この問題について詳述する余裕は、今はないので、他日に譲るが、雅澄の「地理弁」も昔の事はさだかに知られないが、けだし今の津呂浦あたりならんか…」と、宇多の松原の時と同じく、あいまいな表現をして誤解を招いた。高知県の郷土史学の先覚故寺石正路氏すら、兼山の室戸港記に釣られて、つい津呂が室戸で、土佐日記の室津だと誤ったと見るべきであろう。

室津の泊りが、室津港であって、津呂港でないことを昭和七、八年のころ関田駒吉・吉岡高吉両氏が「土佐史談」で主張したが、国文学界では依然として津呂で通っていた。それを久保田氏が昭和三九年に「土佐史談」で力説され、松村誠一氏が国文学界に紹介して、萩谷氏が取り上げ津呂説の誤りであることが一般に知られたのは、たしかに久保田氏の大きい功績である。近代の旺、みな「津呂」となっていたのが、萩谷（全注釈）松村（小学館）など最近は、現在の室津としている。土佐自体においてこのような混乱の生じた事情はもっと詳しく考えるとおもしろいが今はおく。

また貫之の室津の泊りが、室津の中のどこであるかについて、㈠現在の室津港説…吉岡高吉・山本武雄、㈡原池説…今村明恒理博・

久保田博、の二説に分かれている。この問題も、今述べる余裕がないので、両方の場合について論じておいた。あえて私の現在の判断をいうべきだとすれば、現在の港から一・五kmも遡る原池とするには土佐日記の記事自体と矛盾する種々の障害がある。また地質学的にも一概にそう断言できない点がある。今昔物語の記事から考えても、現室津港付近、即ち旧川尻である「水尻」部落からマイゴの井戸付近、津寺山の周辺から著しくは、旧室津川の自然流域を遡らない辺ではないかと考えられる。この問題も他日に譲る。

むすび

右に長々と筆者には未知で難解な気象学・航海学・地学その他の諸学の領域にはいり込んで考えてきたが、私の結論は、おのずから明かになってきた。私は種々の角度から、「月」の点にある程度の潤色を認めて、もとの室津に帰ったと判定する。月の点の矛盾はもちろん、ぬぐいきれないが、他の二説よりは無理が少なく納得がいきやすいと信ずる。

そして一月十七日の「みふねかへしてん。ふねかへる。」同十八日の「なほおなじところにあり。」という文を、素直によめば、よむほど、右以外に考えようがない。この文章表現の歪みに比ぶれば、月の項の潤色など比重が違う。土佐日記には、筆者の行動については、特に航海に関しては、虚構はないと私は言いたい（少なくとも土佐の国に関する限り）。天候についても、晴雨、波風等、事実に忠実に書いていると言える。室津滞在中の一月十二～二十一日の天候に関する記事を気象台の人に判断してもらったとき、「良く書いている。その間の気象の動きがよくわかる。」といって感心していた。私は、なるべく具体的に客観的に、問題点を明らかにしたかった。しかし、気象、地形、その他、まだまだ今後の調査と研究を必要とすることが多い。未熟不備も多いと思われるが、ひとまず発表して、大方のご批判ご教示を乞う次第である。多くの先学諸氏へ非礼に渡る点はおゆるし願いたい。特に郷土の先輩久保田氏は今は故人となられその駁論をきく由もないのはまことに残念である。氏の提案の当否は別として、土佐日記の理解を深める上に大きい功績のあることを特に記しておきたい。

（一九七四年二月）

付記　この論考は、昭和47年度文部省科学研究費補助金による研究を含む。